

大相撲常陸大宮場所開催

4月16日、快晴のもと桜が舞う西部総合公園体育館で、大相撲常陸大宮場所（主催：大相撲常陸大宮場所実行委員会、一般財団法人常陸大宮市体育協会）が開催されました。今回は平成27年以来2年ぶりの開催となり、来場者は前回を超える3,560人でした。

当日は、午前8時の開館前から多くの人が詰めかけ、大相撲の人気と地方巡業への期待の高さがうかがえました。取組の前には、会場入口で握手会が開催され、普段は近寄ることのできない力士と握手をしようと多くの観客が順番を待ち、ロビーは大相撲に関連したグッズや、お弁当などを買い求める人で溢れていました。

会場の外では、あきない組によりもつ煮込みや焼き鳥、飲み物などが提供され、観客に交じって力士も一緒に列を作っていました。また、JA常陸大宮地区女性部の協力で、地元の食材で作ったけんちん汁とカレーライスが力士たちに振る舞われました。茨城の郷土料理であるけんちん汁は力士たちに好評で、次回巡業に来た時にもぜひ作ってほしいと要望があったほどでした。

また、桜吹雪の舞うグラウンドでは、力士たちが短距離走をしたりジャンプをしたりと、リラックスした表情を見せ、常陸大宮市での巡業を楽しんでいました。

会場内の土俵では、力士たちの稽古や子ども相撲の稽古、髪結実演、十両、幕内、横綱の土俵入りなどが行われ、取組が始まり茨城県出身の力士が登場すると、ひと際大きな声援が送られ、会場が一体となって勝負の行方を見守りました。

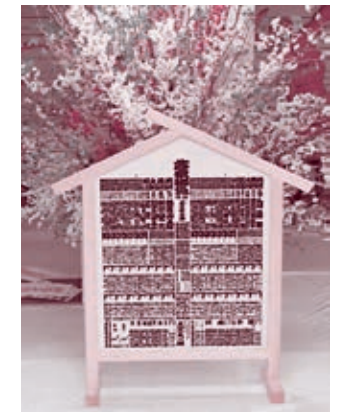


常陸大宮場所の歴史

常陸大宮市域では昭和11年と昭和28年ごろ、昭和60年、平成27年に大相撲巡業が開催されました。今回は5回目の巡業でした。

板番付

大相撲で用いられる力士の順位表である番付ですが、昭和11年の巡業で使われた板番付が下町の甲神社に残っています。板番付は、高さ165cm、巾140cmの大きさの杉材で作られていて、根岸流の独特の文字で、力士や行司などおよそ100人の名前が書かれています。墨色が薄くなり、すべての文字を解読することはできません。なお、確認されている最古の板番付は、天明年間（1780年代・相撲博物館蔵）のものでした。



▲ 今回の巡業の板番付



▲ まわりを掘る



▲ 俵を置く



▲ 俵を埋める



▲ 表面を叩き固める

地方巡業豆知識

初切（しょっきり）

相撲の禁じ手を面白おかしく紹介する見世物で、相撲の取り組みの前に決まり手四十八手や禁じ手を紹介するために江戸時代から行われていました。今回の巡業では、大洗町出身の天空海らが初切を行い会場を笑わせました。



▲ 初切

相撲甚句（すもうじんく）

昔は甚句のことを型と呼んでいて、土俵の上で攻める型、守る型を見せながら歌っていました。現在は化粧廻しを付けた力士6～7人が輪になり、1人ずつ歌う力士独特の唄のことをいいます。手拍子・足の音頭に合わせて歌っています。



▲ 相撲甚句

太鼓打ち分け（たいこうちわけ）

昭和44年に相撲業界初の生存者叙勲を受けた「名人呼び出し太郎」が披露をはじめたものです。太鼓には、寄せ太鼓・一番太鼓・はね太鼓の3種類があります。



▲ 太鼓打ち分け